

非暴力平和の旗を高く掲げて

理事長 水戸 潔

この度、理事長を拝命し、経験も浅くその器に足らぬ者として身の引き締まる思いです。そして、ここまで導いてくださった過去の理事の皆さま、会員の皆さまに、この紙上をお借りし心からのお礼を申し上げると共に、これからもお励ましをお願い申し上げます。

飯高前理事長のもと、共に歩んだ3年を振り返ると、この国は、今ますます右傾化し、日々戦争に傾斜していつている時代であったように思われてなりません。

2014年7月、安倍内閣は歴代内閣が違憲としてきた集団的自衛権行使の解釈を、180度転換し合憲とし、これをテコに翌2015年9月、本命の新安保法が強行採決され、遂に自衛隊が海外に出て行って同盟国の戦争に参加できる国となってしまいました。これは憲法違反であることは明らかであるが、いまはこれを正当化するために、いよいよ憲法九条そのものを壊して戦争の出来る条文にしようというもくろみが進んでいます。それと同時に、沖縄への差別や弾圧、原発再稼働、森友、加計学園問題に見られる国民に対する欺瞞に満ちた姿勢は目に余るものです。

この間、私たちは何をしてきたのだろうか。

2015年、戦後70年を節目に「友和会戦争責任告白」を発表し、過去の当会の過ちを反省する一方、新安保法制への厳しい批判と抵抗を表明し立ち上がった。2016年、友和会誕生90年を節目に「日本友和会90周年記念誌」を発行し、改めてこの会の立ち位置を確認した。2017年、改憲阻止のための3000万人署名運動に取り組み、沖縄基地反対運動への連帯、原発再稼働、新建設反対への連帯、平和に生きる権利確立等にも取り組んできた。

そして、その成果はどうだったのか？と問われると、残念ながら現政権の圧倒的力の前で、前進を阻まれているようにも見える。

しかし、考えてみよう。私たちは政権を倒そうという運動をしているのではない。真理と正義をめぐる（何が真理で何が正しいのかという）戦いをしているのである。

私はこの事を思うとき、戦争真っ只中の1941年、矢内原忠雄が弟子の学生の卒業に贈った言葉を思いだす。この時局に君たちを世に送るのは、小羊を狼の中に送るようなものだと言い、戦いの中では態度を鮮明にし、撤退を余儀なくされた時は、そこに真理の旗を立てて帰ってこい、という主旨の言葉を贈っている。

これを、日本友和会に置き代えてみる

と、私たちの真理をめぐる戦いは、一見敗北に見えたりする時があるかも知れない。しかし、私たちは、しっかりそこに旗を立てておく。後の時代の人たちにわかるように。そして、その旗をいっそう高く掲げて継承してくれるように。その旗とは、言うまでもなく「非暴力平和の旗」である。私たちはこの旗を、守りぬぎ前進しよう。

最後に、日本友和会についての私の理解を述べます。

この会は1926年、アメリカ及び日本のキリスト者によって発足し、今日まで92年の歴史を刻んでおり、現在、友和会の理念「非暴力平和」に賛同される方は誰でも入会できる。しかし、その会則の第二条（本誌表紙右上）を見ると違和感を抱く方もおられるのではないかと思う。

私は、第二条は友和会理念の「出自」を表現したものであり、何らかの条件を表すものではないと理解しています。出自とは「出どころ、生まれ」であり、人に例えれば親のようなものです。私は日本友和会の理念を生んでくれた親の思いを大事に行きたいという思いで、この条文を受け止めています。